偉人の一生と音楽



朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2026

偉人の一生と音楽

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2026

まえがき

偉大な領袖金日成（キムイルソン）主席は深奥な思想・理論と非凡な指導力、壮大な革命実践によって祖国と人民、時代と革命に対し不滅の業績を積み上げた不世出の偉人である。

10代の若年で革命の壮途についた金日成主席は、二度の革命戦争と二段階の社会革命、二度の復興建設と各段階の社会主義建設を勝利へ導いて、わが国を自主、自立、自衛の社会主義国家にうち立てた。

主席は、複雑かつ苦難に満ちた革命闘争の道を歌と共に踏み分けてきた。

誰よりも音楽を愛する万景台の家門に生まれた主席は、幼年期から両親に愛国的な歌謡を教えられながら革命の大志を育み、日本帝国主義に奪われた国を取り戻す誓いの歌を歌いながら祖国解放の聖戦に決然と身を投じた。

主席は『朝鮮の歌』『思郷歌』『反日戦歌』など数多くの不朽の名作を自らつくるとともに、必勝の信念と敵撃滅の意志のこもった歌を歌いながら苦難に満ちた抗日血戦の道を歩み続け、建国と戦争、社会主義建設の日々、喜ばしい時も苦しい時も歌を歌い、聴きながら勝利の楽観に満ちて朝鮮革命を導いた。

主席はしばしば幹部たちに、人間は歌を歌いながら楽天的に生活し仕事をしてこそ生き甲斐を感じ、力がわくものだ、私の

体験によると、歌は革命勝利の象徴である、歌声が高ければ国が興り、党が強くなる、歌声の高いところに革命の勝利がある、と語った。

一生、音楽を愛した主席の革命指導の過程には、歌にかかわる数多くのエピソードが伝えられている。

本書は、金日成主席の革命的生涯に生まれた音楽にかかわる数々のエピソードのうち、一部を編集した。

目　　次

歌と共に培った愛国心

苦難に満ちた抗日革命闘争の道で

建国の日々に

砲火の中で響いた勝利の歌

創造と建設も歌と共に

幸福と忠誠の歌

歌と共に培った愛国心

祝　福

万景台の一家は先祖代々、貧乏な小作人の生活をしてきた。

毎日、薄がゆをすする貧しい暮らしだったが、万景台一家の人々は、祖国と人民のためとあれば誰もが惜しみなく身を投げ出し、肉親や隣人の間に互いに助け合い、思いやる心が厚かった。

金日成主席も幼い時から常に両親や目上の人たちを尊び敬った。

真夏になって祖父が手入れしていた桃が赤みを増していたときである。

主席は一番大きく、よく実った桃を選んで摘み取り、真っ先に祖父に差し上げた。

すると、祖父は孫が殊勝に思えて膝に座らせ、ニルリリ節に歌詞を付けて聞かせた。

クンニリ　ニルリリ　ニリナ　ニリ　ニルリリ
この山　あの山を登り越えて
松の種を一握り拾い集め
この山　あの山に撒くと松林が生い茂る
……

この歌には、孫が国の立派な担い手になるようにと願う切なる思いがこもっていた。

主席は手を叩き、祖父に従って楽しく歌を歌った。

生家に響いた『子守歌』

父の金亨稷先生は、長男の金日成主席に非常に大きな期待をかけ、国の柱に育てるために教育に格別の関心を払った。

ある日、金亨稷先生はすやすやと眠っているわが子のそばに座り、紙切れに書いた歌詞を見ながら『子守歌』を口ずさんだ。

この『子守歌』は、わが子が一日も早く育って国の英雄になるよう願ってやまない金亨稷先生がつくった歌である。

ねんねんわが子よ　ねんねんいい子よ
ねんねんわが子よ　ぐっすり眠るんだ
親戚には和睦童　父母には孝子童
愛する掌中の珠　ねんねん

それ以来、万景台の一家はこの『子守歌』を覚えて主席に歌って聞かせた。

夜になると、万景台の生家では『子守歌』が静かに響いた。

切なる願い

万景台の生家の裏庭を通って万景峰の麓へ少し上がると、1本のクヌギがあった。

祖父の金輔鉉はこの木に孫のためのブランコを吊るした。

母の康盤石女史はブランコにわが子を乗せ、ブランコを押しながら歌を歌った。

康盤石女史がわが子に聞かせた歌の中には手ずからつくった歌もあった。

空は高く
地は広い
お前は将来に
天地より大きくなってくれ

歌にはわが子が国と民族の柱、ますらおに育つことを願う康盤石女史の切なる思いがひめられていた。

母の願い通り主席は祖国解放の遠大な志を胸に抱き、たくましく成長した。

懇切な願い

金日成主席は幼年期から歌が上手で、読書も好んだ。

順和学校で教鞭を取っていた金亨稷先生は、家に戻れば誰よりもまずわが子の名を呼んだ。

すると、主席は友だちと面白い遊びをしている途中にもすぐ「はい！」と答え、父のところへ駆け付けた。

金亨稷先生は大人の言い付けをよく守り、友だちを愛し、仲良く過ごしてこそ将来に立派な人になると言い、自ら教えた歌を歌わせた。

そのたび、主席はぐずぐずせず人前に出て元気よく歌を歌った。

ねんねんわが子　早くも小学校
ねんねんわが子　もう中学校、大学
博士になれ　英雄になれ
国の解放十分にすべし　ねんねん
……

歌が終わると、金亨稷先生は英雄になるにはどうすべきかと尋ね、主席は両親のお言葉をよく守り、朝鮮の言葉と文字を熱心に学んでこそ将来に英雄になれると大きな声で答えた。

万景峰のこだま

1918年の春、康盤石女史はわが子と共に烽火里から万景台に戻った。

幼い金日成主席は朝鮮国民会事件で日本警察に逮捕された父を懐かしがり、一日に何回も、幾晩寝たらお父さんが帰ってくるのかと尋ねた。

そのたびに康盤石女史は、お父さんが日本警察と闘っているが、やがてお帰りになるだろうと答え、話題を変えた。

朝鮮国民会は、1917年3月23日に金亨稷先生が結成した反日地下組織であった。

全人民が団結し、自らの力で国の独立を成し遂げ、真の文明国を建設することを目的として闘っていた朝鮮国民会は、その年の秋に組織の一部が露出し、100余人のメンバーが連行され、金亨稷先生も逮捕されたのである。

ある日の晩、康盤石女史はわが子を万景峰のブランコ場へ連れていった。

この日は、宵の口から月がとりわけ明るかった。

ブランコに腰をおろした康盤石女史は、わが子を膝に座らせ、静かに言った。

「ツンソニ、あの前の大同江の氷がすっかり解け、木の葉が青くなってもお父さんは帰っていらっしゃらないのね。お父さんは

国を取り戻すために闘ったのに、それがなんの罪になるというの。お前は早く大きくなって、お父さんの仇を討つんだよ」

母の言葉を聞いていた主席はきっぱりと答えた。

「お母さん、私が大きくなればきっとお父さんの仇を討ち、国を取り戻します」

康盤石女史はわが子の頭を撫でながら、お前は大きくなったら、きっと国を取り戻す英雄になるのよ、母もお父さんのようにお前を信じていると言った。

主席は母の前で、早く大きくなってきっと父の仇を討ちます、と重ねて誓った。

ブランコを降りた康盤石女史は、ブランコにわが子を座らせ、軽く押しながら歌を歌った。

主席も母に従って歌を歌った。

歌声は静まり返った万景峰の夜空へこだました。

読書の場で教えた歌

金日成主席は「人間はまず自分の国についてよく知らなければならない」という父の言葉を体し、10代の年少の身で単独で千里(日本の百里)余りの道を歩いて中国の八道溝から万景台に帰り、七谷の母の実家に寄宿しながら彰徳学校5学年に編入した。

彰徳学校の裏山には読書の場があった。

主席はたゆまぬエネルギーと探究心を身に付け、この読書の場で本を読み、復習と予習もした。

そして、この読書の場で自分が読んだ書物と詩の内容を学友たちに話した。

ある日、学友たちと共に読書の場に上った主席は『挺身歌』を教えると言った。

学友たちはみな嘆声を上げ、手を叩きながら喜んだ。

主席が先に一小節を歌うと、学友たちはそれにならって歌った。

悲しい　朝鮮民族よ
4千余年　歴史国で
子々孫々　福楽あって
今日の境遇は何事だ
鎖に縛られた私
皆さんの手で断ち切り
独立万歳の雷鳴に
東海が沸き、山が動く
……

学友たちは歌を歌いながら、奪われた国を取り戻す決意を固めた。

該博な知識

金日成主席が彰徳学校に通うとき、学友たちは勉強の面で主席から多くのことを教えられた。

ある日の授業時間に彼らは、白頭山と金剛山の高さは何メートルで、どの山がより高いのかという算数問題を解いた。

授業が終わったとき、主席は学友たちに白頭山と金剛山はどこにある山なのかと尋ねた。

答えに窮している彼らを見回していた主席は、黒板にわが国の地図を描き、それを指して言った。

これはわが国の地である。白頭山は、わが国の北の方にある山で、一番高い山である。白頭山にはいろいろな樹木が多く、各種の獣や鳥も棲んでいる。ところが、これら全てが下駄を履いた日本人に踏みにじられている。景色の美しい金剛山も同じである。だから、われわれは必ずこれらの山を取り戻さなければならない。そのときには、われわれもみな白頭山や金剛山に行って見ることができる。

主席の言葉を聞いた学友たちは、日本帝国主義に麗しい祖国を奪われた義憤を抑えることができなかった。

奪われた国を取り戻すためには勉学に励むべきだと言った主席は、金亨稷先生から学んだ歌を学友たちに教えた。

ダイヤも磨かないと
艶を出せない
人間も学問を修めてこそ
真の徳行が現れる
……

学友たちは意気揚々として歌を歌った。

その後、学友たちがこの歌を歌うたびに、主席は、時間を無駄にする人は無知になり、時間を惜しんで勤勉に励む人は広い知識を持つようになる、知識は光明であり、無知は暗黒である、と言い聞かせた。

『鴨緑江の歌』

金亨稷先生は幼い金日成主席に、朝鮮に生まれた男児なら当然、朝鮮をよく知るべきだ、わが国がどうして滅んだのか、わが人民がどれほど悲惨な暮らしをしているのかを体験する必要がある、と言った。

父の言葉を肝に銘じて祖国に出た主席は彰徳学校で勉強した。

1925年1月のある日、主席は外祖父から、父が再び日本警察に逮捕されたという思いがけない知らせを聞いた。

10代の年少の主席は、父の敵、万景台一家の敵、わが人民の敵を討つために生命を賭して戦おうと決心し、故郷万景台を発った。

价川までは汽車に乗り、それからは徒歩で13日ぶりに葡坪に着いた主席は、風に衣服のすそをはためかせながら、凍てついた鴨緑江に重い足を踏み出した。

祖国を離れたらいつまた、この川を渡ってこられるだろうかという思いが胸をえぐり、主席はなかなか足を運ぶことができなかった。

主席は後ろの土手に転がっている小石を一つ拾って握りしめた。

祖国のしるしとなり、祖国を思い出させるものであったら、なんでも大事にとっておきたかったのである。

主席は誰かがつくった『鴨緑江の歌』を口ずさみながら、ゆっくりと川の向こう側へ足を踏み出した。

1919年3月1日
この身　鴨緑江を渡りし日
年ごと　この日きたりても
誓い果たさずんば　われ帰らず
……

主席は、悲憤やるかたなく祖国の山河を何度も振り返りながら心の中から、朝鮮よ、私はお前のそばを離れてゆく、お前と離れてはしばしも生きていけない私だが、お前を取り戻すため鴨緑江を渡ってゆくのだ、鴨緑江を渡れば他国だが、他国に行ったとてお前を忘れられようか、朝鮮よ、私を待っていてくれ、と叫んだ。

こんなことを考えながら、再び『鴨緑江の歌』を歌ったとし、主席は回顧録『世紀とともに』に次のように書いている。

「私はその歌を歌いながら、いつまたこの地を踏むことができるだろうか、私が生まれ育ち、祖先の墓があるこの地に再び帰る日は、いったい、いつのことだろうか、こう思うと幼い心にも悲しみを抑えることができなかった。私はそのとき、祖国の悲惨な現実を目の前に描き見、朝鮮が独立しなければ再び帰ってはくるまい、と悲壮な誓いを立てたのである」

苦難に満ちた抗日革命闘争の道で

『朝鮮の歌』

1927年1月、吉林毓文中学校に編入した金日成主席は、ここを拠点として吉林を中心とした広い地域でより積極的な革命活動を繰り広げた。

主席が冬休みに撫松に来て革命活動を行っていた1928年1月初めのある日。

主席は異国の地で生まれ育っている朝鮮少年たちに愛国心を植え付け、奪われた国を取り戻す覚悟を培うことに役立てる歌をつくることを以前から考え、歌詞や曲の創作に精魂を傾けた。

主席は白山学校のオルガンを利用し、とうとう不朽の名作『朝鮮の歌』を名曲に仕上げた。

歌は、主席の創刊した『セナル』新聞に載せられて広く普及した。

主席は『朝鮮の歌』の練習に励んで演芸宣伝隊の初演舞台に乗せようと言った。

そして、自らこの歌をセナル少年同盟員に教えた。

朝の日差しが美しくて
わが国の名を朝鮮と呼んだ

こう珍しく美しいわが国
この世にはまたとないだろう
……

不朽の名作『朝鮮の歌』はその後、常に演芸宣伝隊の演目でメイン作品となった。

『朝鮮の星』

1928年10月のある日の夕方、革命組織のメンバーが参加した会合が開かれた。

会合には、日本帝国主義の吉会線鉄道敷設に反対するデモに参加した金赫、車光秀、崔昌傑をはじめ10余人の革命組織メンバーが参加した。

彼らは互いに固く手を取り、挨拶を交わした。

やがて金赫が立ち上がり、部屋に集まったメンバーたちを見回しながら普段とは違った興奮した声で言った。

「皆さん！

これから『朝鮮の星』という歌を学びましょう。

この歌は、有名な詩人や音楽家が創作したものではなく、われわれの知恵を集めてつくったものです。

だから、未熟な点も少なくないでしょう。

しかし、この歌にはわれわれの指導者ハンビョル(一星。金日成

主席のこと）同志を朝鮮革命の導きの星として迎えた私たち、青年共産主義者の限りない喜びと誇りがこもっています。

真っ暗な夜空の下で血の涙を流し、さ迷っていたわが人民が燦然たる導きの星を迎えた今日の喜びと栄光を抱いて歌を歌いましょう……」

並外れて情操豊かで情熱的な金赫は、上気した顔で即興詩を詠むときのように歌詞を読んだ。

激情に駆られて震える彼の声は青年共産主義者たちを興奮させた。

歌詞を読み終えた金赫は、歌を一度聞いてみろと言ってトゥンソ（洞簫）で曲を演奏し、再び声を出して歌を歌った。

青年共産主義者たちは、音頭をとる金赫について歌を歌った。

歌を学んだ後、みなが歓喜にあふれて歌の意味について話し合っている中、車光秀が新しい事実を話して彼らはこみ上げる感激を抑えることができなかった。

車光秀は、この歌を聞いた主席が、若い人をそんなに推し立ててよいものでしょうかと怒っていたとし、切々と語った。

「……私たちはハンビョル同志の言葉をたった一度もたがえたことがありません。

それは、私たち自らがハンビョル同志を革命の指導者、統一団結の唯一の中心としていただくことを決心したからです。

しかし、『朝鮮の星』を歌わないでほしいというハンビョル同志の言葉だけは受け入れることができません。

皆さん！

考えてみなさい。

これまで朝鮮の共産主義者と愛国者がどうして全領土を赤い鮮血で染めながらも残酷な失敗だけを繰り返してきたのか。

それは、革命の正しい進路を明示し、大衆を一つの団結した勢力として結集して勝利へ導く賢明な指導者がいなかったからです。結集しようとしても団結の中心がなく、前進しようとしてもまっすぐに前進する道を見出すことができませんでした。ところが、暗黒の中で呻吟していた祖国の地に、ついに夜明けが始まりました。夜空に燦然と輝く明星のように、私たちの前途を示す指導者が現れました。

その方はまさに、私たちが一様に仰ぎ慕う金成柱（キムソンジュ）同志です。金成柱同志こそ、祖国解放をもたらす朝鮮の明星です。

それで私たちは最近、金成柱同志を統一団結の永遠なる中心といただき、ハンビョル同志と呼ぶことを組織の名において決定しました。

そして、金赫さんがわが人民の志向と念願を反映して創作した『朝鮮の星』を不滅の革命頌歌と定め、この歌を広く普及することも組織の決定として採択しました」

車光秀は、われら全てがハンビョル同志に従って祖国に凱旋する決意を固め、不滅の革命頌歌『朝鮮の星』を声高らかに歌おうと呼びかけた。

瞬間、青年共産主義者たちは申し合わせたように熱烈な拍手で彼の言葉に呼応した。

この日の会合に参加した青年共産主義者たちが課題を受け、

各地に革命頌歌『朝鮮の星』を広く普及した。

主席はこのときのことを振り返り、回顧録『世紀とともに』に次のように書いている。

「金赫は私には内緒で、車光秀や崔昌傑とはからって吉林一円にその歌を普及した。私を星になぞらえた歌をつくって歌ってはいけないと、私は彼らを厳しくいましめた」

主席があれほど引き止めたが、不滅の革命頌歌『朝鮮の星』は日が経つにつれて広く歌われた。

馬車の上で歌った歌

1928年8月初めのある日。

金日成主席は金赫、金利甲など10余人の革命組織メンバーと共に演芸宣伝隊員たちを連れて大荒溝へ向かった。

江東村に至って3頭立ての大型馬車が一行に加わった。

演芸宣伝隊員たちは小鼓とハーモニカを持って馬車に乗った。

主席は共青員たちと共に後ろの席に座った。

馬車が走り出してしばらく経ったとき、主席は演芸宣伝隊員たちに事故が起きないように注意を喚起し、このよき日に活気に満ちて歌を歌い、楽器も演奏してみるようにと言った。

情熱家である金赫が走る馬車で立ち上がった。

しばらく左右に広がった自然の風景を見回していた彼は、感情を込めて即興詩を詠んだ。

祖国についての彼の即興詩は、全ての演芸宣伝隊員たちを深く感動させた。

しばらくして馬車は坂道を越えて、果てしなく広がった野原の道に入った。

瞬間、演芸宣伝隊員たちは一斉に歓声を上げた。

大荒溝村が近くに見えたのである。

このとき、主席は興奮した声で言った。

「本当に楽しい行軍路です。この道は、金赫さんが詠んだ祖国への意義深い行軍路とつながっています。われわれは必ずこの意義深い行軍路を走りに走って、祖国の地に行き着くべきです。

皆さん、『戦場』に近付いたのだから、革命の歌を力強く歌いましょう」

主席の言葉が終わると、金赫が歌の音頭をとった。

演芸宣伝隊員たちはそれに従って、こぶしを握った腕を振りながら『革命歌』を元気よく歌った。

われらは燃える炎だ
鉄鎖を断ち切るハンマー
希望の標柱は赤旗
叫ぶスローガンは闘争
意地汚い声に喉かれる
われらの血を絞る者
激しい最後の戦闘で

われらの隊伍は百倍
……

演芸宣伝隊を乗せた馬車は昼頃に大荒溝に到着した。
そして、午後に朝鮮人小学校で地元の人民を反日闘争へ奮い立たせる講演と演芸宣伝隊の公演を行った。

自ら教えた『思郷歌』

金日成主席は、初期革命活動時期に不朽の名作『思郷歌』を創作した。
1930年秋のある日の晩、革命組織のメンバーたちは金日成主席と共に五家子の三星学校で一夜を過ごした。
この日には窓から流れ込む月光がとても明るかった。
組織のメンバーたちが里心がついて明るい月を見上げていたとき、主席が静かに『思郷歌』を歌った。
『思郷歌』を聞いていると、祖国と故郷のことが思い出されてならなかった。
メンバーたちは主席のそばに集まり、その歌を教えてもらいたいと頼んだ。
主席は彼らの要望を快諾した。
そして、今夜は皆さんと共に歌を歌ってみようとし、ゆっくりと『思郷歌』を歌った。

古里をたつ朝　わが母は
門に出て涙ぐみ　「さあ　お行き」
その言葉　ああ　耳をうつ

わが家のほど近く　小川あり
弟としぶきあげ　たわむれた
その姿　ああ　浮かびくる

大同江うるわし　万景台
なつかしや山や川　解放の
晴れの日に　ああ　帰らん

メンバーたちは主席について2回、3回も『思郷歌』を歌った。
その日、主席は彼らに母なる祖国と故郷万景台についていろいろと話した。
その夜、みんなは厳かな感情にひたり、祖国から日本帝国主義者を追い出して懐かしい故郷に帰る日を思い描きながら眠れなかった。

『花を売る乙女』

1930年6月の夏、金日成主席は卡倫で行われた会議でチュチェ思想の原理を明らかにし、朝鮮革命の主体的な路線を打ち出した。
卡倫会議の方針を貫徹するために革命活動を行っていた主席が

五家子に来たのは、1930年の初秋だった。

ある日の夕方、主席は、五家子の青年同盟と農民同盟の数人の活動家を三星学校の教員室に呼んだ。

主席は彼らに、遠からず10月革命記念日を迎えることになるが、この日をどう過ごすかという問題を相談するために集まってもらったと言った。

ところが、誰一人としてこれといった意見を出そうともせず、ただ主席の言葉を待っていた。

主席は、革命記念日を大衆教育の場にしなければならない、そのためには大衆の心の琴線に触れる演芸公演を行うべきだ、私は『花を売る乙女』という歌劇について考えてきたが、その内容を一度話してみたいと言った。

主席の話を聞いた彼らの胸は高鳴った。

革命組織メンバーの支持を得た主席は、革命歌劇『花を売る乙女』の台本を書き始めた。

主席の泊まっていた平凡な農家の窓からは毎晩明かりが消えなかった。

そんなある日の夕方。

朝鮮革命軍隊員たちの参加の下に行われた会合を締めくくった主席は、もう一つ討議したいことがあるとして歌劇の台本を取り出した。

表紙には闊達な筆致で『花を売る乙女』と書いてあった。

一人の隊員がその台本を読み、それを聞く隊員たちはみな目頭を熱くした。

台本を読み終わると、主席は皆さんの意見はどうかと聞いた。

みなは素晴らしい作品だといって喜んだ。

すると主席は、今祖国のどこに行っても『花を売る乙女』のコップニのように哀れな立場の子どもが多い、そのような子どもたちを思うと夜にもまともに眠れないと言った。

そして、すぐ配役を決めて練習を始めようと言った。

こうして翌日から歌劇の稽古が始まった。

数日後、三星学校に出向いた主席は革命歌劇『花を売る乙女』の試演を観た。

この日、出演者の歌謡や演技に細やかに助言を与え、衣装も正してやった主席は、作品の主人公コップニは、敵に両親を失い、恨めしい世の中を呪いながら悲しみの中で生きていく貧しい少女だから、彼女の衣装は作中人物の生活状況に合わなければならない、そうしてこそ、その人物の性格が直観的に感じられるのだと言って、次のように語を続けた。

「貧しくて可愛そうなコップニが着ているものは、今の衣服に比べようもなくみすぼらしいものです」

主席の情熱的で細心の指導によって、革命歌劇『花を売る乙女』は、思想性・芸術性の高い立派な作品に仕上げられた。

とうとう公演の日が来た。

金日成主席はそのときのことを感慨深く振り返りながら、回顧録『世紀とともに』に次のように書いている。

「五家子にはわれわれが組織した演芸隊があった。……

私も吉林時代に書き始め、何度かリハーサルをしてみた『花

を売る乙女』の台本を完成させる作業に取り組んだ。そして台本が完成すると、桂永春が三星学校の演劇サークル員を指導して、稽古を始めた。

われわれは10月革命13周年記念日に三星学校の講堂でこの歌劇を上演した」

1930年11月のある日、三星学校は早朝から集まってきた五家子の人々で賑わった。

周辺の部落からも大勢の人が集まってきた。

祝門や祝灯、華やかに飾られた講堂を見た人々は驚きと喜びを禁じ得なかった。

やがて行事が始まった。

満場の歓呼の中で演壇に立った主席は、10月革命の歴史的意義と当時の国際・国内情勢を分析し、朝鮮人民を抗日の聖戦へ呼び起こす演説を行った。

群衆の熱狂的な歓呼の中で主席の演説が終わると、「花体操」が行われた。

ついで多彩な種目の演芸公演が行われた後、革命歌劇『花を売る乙女』の公演が始まった。

継ぎ接ぎだらけの白いチョゴリと黒いチマをまとい、わらじを履いた貧しい少女コップニが、花かごを手にして舞台に出てうら悲しい涙声で歌を歌った。

花をめしませ　きれいな花を
赤白桃色　きれいな花を

病の母さんに　薬を買うの
花をめしませ　きれいな花を

山のふもとに　香る花
赤いツツジに　桃色アンズ
花をめしませ　この花めせば
悲しい胸にも　春が来る

花を売りながら蔑視されるコップニ、失明した妹と警察に連行された兄、世を去る母親、コップニ一家の哀れな境遇に観衆は涙を流した。

亡国の民の悲しみに身もだえしていたコップニが、主席の派遣した朝鮮革命軍隊員である兄の後を継いで、抑圧されさげすまれていた人民の心に革命の花の種を播く最後の場面に至り、場内は大きな感激に包まれた。

公演が終わり、熱狂的な拍手を受けながら舞台に立った主席は、搾取され抑圧される貧しい人々は団結してコップニのように革命の道に奮い立ち、日本帝国主義を追い出して奪われた祖国を取り戻さなければならないという内容の演説を行った。

主席が演説を終えると、群衆はこぞって立ち上がり、場内が割れんばかりに「朝鮮革命万歳！」を叫んだ。

革命歌劇『花を売る乙女』は五家子の人々に大きな感動を与えた。

『朝鮮人民革命軍』

1934年3月、金日成主席が反日人民遊撃隊の組織体系を改編して朝鮮人民革命軍に編成した後のある日のこと。

司令部の指揮メンバーが集まった機会に、主席は一つの小さな手帳を取り出した。

主席が闊達な筆致で書いた歌詞を見た指揮メンバーはみな、主席がいつの間に軍歌をつくったのかと驚き、感動した。

『朝鮮人民革命軍』

1. われらは朝鮮人民革命軍
革命のために戦う赤い戦闘員
闘争綱領は正義のもの
綱領の貫徹に奮闘しよう

2. 朝鮮を占領した強盗日帝は
植民地支配を維持するため
多くの陸海空軍を派遣して
無数の軍事施設を作っている

3. 敵の軍事施設と軍隊は
無産者大衆を虐殺する
敵の陸海空軍を追い出して
無数の軍事施設を打ち砕こう

4. ファシスト日本の支配者は
数多くの監獄を作り
さまざまな軍隊を組織して
無産大衆弾圧の道具とする

5. 社会の不平等と民衆への抑圧を
満州国軍の兵士に暴露して
亡国奴の兵士を止めて
反乱を起こさせよう

6. 悪辣で狡猾な日帝は
無数の法令を作り
各種の税金をかき集めて
無産大衆虐殺の軍費とする

7. 無産大衆を抹殺しようと
各地で奴隷教育を強要し
人民の思想を麻痺させようと
日本語を強制している

8. 野蛮で悪辣な抑圧に
われらは大衆にアピールして
日帝のファッショ支配制度を
こぞって立ち上がり打ち砕こう

『朝鮮人民革命軍』はあっという間に全部隊に広まり、抗日遊撃隊員に愛唱される革命軍歌となった。

『反日戦歌』

1935年1月下旬、金日成主席の率いる部隊は北満州遠征の行軍路で思いがけない危険に直面した。

敵の大兵力がわずかしかならない部隊をしつこく追い続け、そのうえ主席は傷寒にかかったのである。

朝鮮革命の重荷を一身に担った主席が人家一つない山中で病床についたので、隊員たちは途方に暮れていた。

隊員たちは失神状態の主席を揺り起こしながら涙ばかり流していた。

主席は泣いてはいけないと言おうとしたが、口をきくだけの力がなかった。

主席は前後不覚の昏睡状態に引きこまれていった。

翌朝、目を覚ました主席は、密林の空き地に止まっている橇と、その周りに倒れている16人の戦友を目にした。

今では、彼らが主席を慰めるのではなく、主席が彼らを励まさなければならなくなった。

しかし主席は指一本動かす力もなく、意識はまた、朦朧とした霧の中に沈んでいった。

そのとき主席は、ここで挫けてしまえば、再生の希望をわれわれに託している人民が悲嘆に暮れるだろう、わが人民の悲哀は日本帝国主義者の喜悦となり、わが人民の絶望は日本帝国主義者の歓喜となる、われわれが挫折すれば日本の資産家と軍国主義者を喜ばせるだけだ、と考えた。

主席は重く垂れ下がる瞼を雪でこすり、せわしく駆けめぐる思いを一つ一つまとめていった。

もし、革命軍が天橋嶺の冷たい雪の中に消えてなくなれば、朝鮮人民に対する日本帝国主義者の暴圧は一挙に10倍、100倍に募るだろう。

主席は天が崩れても歯を食いしばって生き延び、革命運動を続けなければならない、われわれが生きて帰らなければ、東満州でわれわれを待ちうけている多くの仕事はどうなるというのだ、ここで挫折すれば、わが人民は永遠に日本帝国主義者の奴隷になってしまうだろう、と考えた。

ふと、主席の脳裏にある詩想がひらめき、橇の近くに倒れている年少の隊員を揺り起こして歌詞を書き取らせた。

初めは主席とその隊員が歌を歌った。

すると倒れていた隊員たちが一人、二人と起き出して合唱した。

こうして生まれた不朽の名作『反日戦歌』はそのまま主席の

革命思想であり、信念であり、隊員たちの勇猛な英知と意志を固めさせる闘争の武器だった。

部隊はこの歌を力強く歌いながら、血のにじんだ行軍路を歩み続けた。

人々を感化させた歌

1935年のある日のこと。

金日成主席の引率する北満州遠征隊は、鏡泊湖を渡って額穆に足を踏み入れた瞬間から住民に冷遇された。

それは日本帝国主義者が人民と遊撃隊の間にくさびを打ち込んだからだった。

北満州遠征隊が村に到着すると、大多数の中国の村人は「紅胡子」が来たといって、子どもたちまで連れて逃げ出してしまった。

村に残ったのは老人や病人だけだったが、彼らも家の中に隠れて外には出て来なかった。

村外れの林の中にテントを張って隊員を休息させた後で、主席は村を一巡した。

小学校へ行ってみると、教職員や生徒もみな隠れてしまって見当たらなかった。

主席は校庭にオルガンを持ち出し、それを弾きながら隊員たちと一緒に『蘇武歌』を歌い始めた。

蘇武は胡(えびす)に囚われしも
節を辱しめず
氷雪に覆われし匈奴の地にて19年
渇して雪を飲み
飢えて毛氈を食みては
北海のほとりにて羊を追う
心は漢にあれど
この身老いても還れず
苦難をなめるほどに
心は鉄石の如く
夜半に辺塞にて笛の音聞けば
心は痛みつらさ増す
……

主席は隊員たちと共に楊貴妃の歌も歌った。

朝鮮人民革命軍の隊員たちは漢族の民謡を歌わせても上手に歌いこなした。

この二つの歌は、中国の勤労民衆に特に愛唱されている名曲だった。

主席は、当時額穆であったことを感慨深く振り返り、回顧録『世紀とともに』に次のように書いた。

「オルガンに合わせて『蘇武歌』と楊貴妃の歌を歌っていると、隠れていた小学校の高学年の生徒たちが先に好奇心と驚きの色を浮かべてわれわれの側に集まってきた。そして、

私のオルガンの音に合わせて歌を歌い始めた。しばらくすると、教員や村人たちが一人、二人と集まってきた」

遠征隊員たちが中国の歌を上手に歌うという事実に驚かされたのでもあろうが、彼らは遠征隊員たちと自分たちの間に漠然としたものではあれ、一種の共通性を感じたのである。

遠征隊員たちをひどく煙たがっていた人たちが、親しみと驚きを込めた目で見つめるようになった。

逃げていった村人が校庭にみな集まってきたとき、主席は中国語で反日演説を行った。

演説を聞き終えると、村人は「高麗紅軍」は匪賊でもなく馬賊でもない、「高麗紅軍」は本物の愛国的な革命軍であり、紳士の軍隊だといって、遠征隊をほめた。

金日成主席がオルガンを弾きながら遠征隊員たちと共に歌った『蘇武歌』は、それまで「高麗紅軍」について間違って考えていた誤解を解消し、北満州の中国人の胸に熱烈な愛国心、革命意識を吹き込んだ。

『血の海の歌』

『血の海の歌』は、金日成主席が革命演劇『血の海』の台本を執筆しながらつくった演劇の主題歌である。

主席が『血の海』の構想を温め、その台本作業に取りかかったのは、1936年5月の東崗会議の直後だった。

主席は、抗日武装闘争の日々に日本軍警の討伐のため言い知れない試練を経ている人民の姿をたびたび目撃した。

討伐隊の軍刀と銃剣で日に数十名から数百名もの人が斬殺される惨事が打ち続く間島は文字通り血の海だった。

驚くべきことは、間島に住む絶対多数の朝鮮人がそういう悲惨な運命に甘んじようとせず、かえって手に手に銃や棍棒を取って憤然と立ち上がり、抗争を続けている事実であった。

この民族挙げての抗争には女性や子どもも参加した。

彼らの姿から深い感動を受けた主席は、家庭の枠から抜け出して社会変革の運動に飛び込んだ女性たちに厚い尊敬と愛情を感じ、その過程で倒れた夫の後を継いで革命の道を踏み出した一女性とその子どもたちの形象を熟成させた。

ある日、「パイプじいさん」と呼ばれる朝鮮人民革命軍の一隊員と語り合いながら作品のテーマを明らかにした主席は、行軍の日々倒木や焚き火のそばでも夜を明かして演劇の台本を書いた。

こうして部隊が漫江に到着する頃には台本を半分以上書き上げた。

漫江に到着した主席は、革命運動を積極的に援助しているある村長の家で『血の海』の台本を書く作業を続けた。

台本が出来上がると、「パイプじいさん」が演出を受け持った。

ある日、稽古場に出向いた主席は、甲順役を演じる女性隊員に、日本軍に虐殺された乙男を抱きしめて泣きながら主題歌『血の海の歌』を歌う場面を演技してみるようにと言った。

ところが、彼女は歌を歌いながら泣く場面の演技が満足にできなかった。

主席は彼女に、彼女が祖国と間島で身をもって体験したことを一つ一つ想起させ、この演劇はまさに君のような人が体験したことを描いたものだ、日本軍が射殺した乙男は君の実の弟だ、考えてみなさい、ついさっきまで姉さん、姉さんと慕っていた弟が血を流して倒れたというのに、どうして姉の胸に恨みの血の涙が流れないというのだ、と演技を細やかに指導した。

そんな日々に作品が出来上がった。

1936年のある日、漫江村の素朴な仮設舞台で、たいまつとランプの明かりの下に不朽の名作『血の海』の初演が行われた。

公演は始めから人々の心をとらえた。

演劇は絶頂に達し、生命を脅かす敵の銃口の前でもあくまで革命の秘密を守った弟の乙男の死の前で、甲順が恨みにたぎって歌う『血の海の歌』が響いた。

寒風すさぶ　血の海よ
倒れし人は　数知れず
革命に流した血　はかり得ず

あとに残った　悲しみ尽きず
骨身にしみる　恨み深し
死すとも忘れじ　この恨み

甲順役を演じる女性隊員は、主席の教え通りに敵の銃弾に倒れた乙男がほかならぬ自分の弟だと考え、復讐の拳を固く

握りしめて歌を歌い続けた。

嘆くなかれ　世界の無産者よ
革命家一人の　あがないに
16億7000万の　無産政権立つ

甲順と共に涙を流しながら公演を観ていた観衆は、公演が終わると、「日本帝国主義侵略者を打倒しよう！」と叫び、場内は復讐のるつぼと化した。

深く感動した青年たちは舞台に駆け上がり、先を争って朝鮮人民革命軍への入隊を請願した。

主席は当時のことを振り返り、回顧録『世紀とともに』に次のように書いている。

「漫江での演劇公演は山里の素朴な若者や老人を啓蒙し、抗日革命闘争の積極的な参加者にし、後援闘士に変えた」

不朽の名作『血の海の歌』は人民の間で広く歌われ、敵への燃えるような憎悪心と復讐心を呼び起こし、彼らを革命的に教育する上で大きな生命力を発揮した。

『哀れな身の上』

金日成主席の率いる朝鮮人民革命軍の主力部隊が白頭山への行軍途中、漫江村に到着したのは、1936年8月のある日であった。

漫江は、その年の春の種まき時に数日間泊まったことのある村だった。

主席は指揮官たちを呼び、村で大々的な政治活動を行うよう指示した。

そして歌や踊り、演劇などに素質のある隊員たちを呼び集めて、自ら演目をつくり、役の割り振りもした。

主席は演劇組に革命演劇『ある自衛団員の運命』の台本を渡しながら、内容を把握してから台詞を暗記するようにした。

この演劇は、主席が戦闘と行軍が続く日々に自ら書いた作品だった。

間もなく、主席の指導の下に演劇の稽古が始まった。

ところが、初めのうちは誰も彼も演技が上手にできなかった。

主席は、自衛団長役を演じる小隊長の演技を指導し、母役を受け持った女性隊員の演技もおのずと涙が出るよう細やかに助言をした。

演劇組の演技を指導した主席は、音楽組と舞踊組の稽古にも力を入れた。

このように一昼夜を猛烈に練習して、部隊が漫江を発つ前夜に演芸公演を行うようになった。

仮設舞台を作り、演目もきちんと書いて貼り出した。

村人たちは公演が始まる前から集まって庭を埋めた。

公演に先立って主席が短く演説を行った。

主席の演説が終わると、すぐ演芸公演の幕が上がった。

『遊撃隊行進曲』『反日戦歌』の合唱から始まった公演舞台には、独唱、重唱、ハーモニカ合奏など多彩な演目についで革命演劇『ある自衛団員の運命』がのせられた。

演劇は始めから観衆の心をすっかりとらえた。

村の老人たちは自分らの境遇を考えながら、演劇に出る老人と共に泣いたり、共に憤激したりした。

実に演劇は漫江の人々の生活そのものだった。

当時の傀儡満州国の公式発表によると、撫松県だけにも4000余人の自衛団員がいたのだから、朝鮮青年のほとんどが強制に自衛団に連れられ、息子を奪われなかった父母もほとんどいなかった。

日本帝国主義者に父母を失い、兄さえ自衛団に強制入団させられ、世知辛い世の中に独り残された妹が『哀れな身の上』を歌った。

夕日赤く　燃え落ちて
空飛ぶ鳥も　ねぐらに帰る
哀れなこの身　悲しいさだめ
誰に嘆き　訴えようか

雁の群れ　飛ぶ彼方の空
浮かぶおもかげ　懐かしや
わが家に戻り　田畑を耕し
父母と暮らすは　いつの日か

涙にうるんだ彼女の悲しい歌声は、観衆の胸に憎悪と闘いの炎を燃え上がらせた。

村人たちは拳を握りしめて叫んだ。

「日本帝国主義者を打倒しよう！」

このとき、観衆の中から二人の青年が舞台に駆け上がり、興奮に震える声で言った。

「私たちは日本帝国主義者の手先である自衛団には絶対入りません。

私たちも朝鮮の独立のために生命を賭して戦うつもりです。

私たちを入隊させてください」

青年たちがわれ先に舞台に駆け上がって入隊を請願した。

主席は彼らの手を強く握り、その場で入隊を承諾した。

観衆は朝鮮人民革命軍に新たに入隊した青年たちを祝って熱烈な拍手と歓呼を送った。

『祖国光復会10大綱領歌』

祖国光復会は、わが国の史上初めての反日民族統一戦線組織体である。

金日成主席は、祖国光復会を創立し、その組織網を全国的な規模へ拡大することに大きな力を入れた。

祖国光復会組織の拡大に心血を注いでいた主席は、1936年12月、自ら祖国光復会10大綱領の解説文を書き、それを朝鮮人民革命軍隊員と祖国光復会の責任幹部の前で説明した。

しかし、主席はそれで満足しなかった。

どうすれば祖国光復会10大綱領を人々に分かりやすく通俗的に普及できるだろうかと深く考えていた主席は、感化力が大きく浸透力の強い歌をつくって普及することにした。

主席は祖国光復会10大綱領を一条項ずつ歌詞にし、『祖国光復会10大綱領歌』をつくった。

1. 2千万の朝鮮同胞　総動員して
反日革命統一戦線　強固にし
日帝の野蛮な支配を覆し
人民政府を樹立するのが第1条だ

2. 労働者と農民は団結し
各階層の大衆と提携し
財産と知識　能力を総動員して
富強朝鮮を建設するのが第2条だ

3. 日本の陸海空軍の新式の武装
全てわれらが奪いとり
躊躇せず勇敢に戦う
われらの軍隊を組織するのが第3条だ

4. 日本人がかき集めた金は
わが同胞の血と汗だ
残らず奪って軍費とし

同胞も救済するのが第4条だ

5. 借金と税金の返済を拒否し
搾取する専制制度に反対し
われらの産業をわが手で建設し
順調に発展させるのが第5条だ

6. 言論　出版　思想　結社　自由を求め
封建勢力　白色テロに反対し
逮捕されたわれらの闘士を奪還し
裏切り者を追い出すのが第6条だ

7. 両班　平民　老若男女を問わず
平等と幸福を共に享受し
か弱い婦女を尊重し見守り
人格と地位を保障するのが第7条だ

8. わが民族を奴隷とする同化教育
戦場で殺そうとする軍事訓練
強く反対し　固く団結して
われらの文化を普及するのが第8条だ

9. われらの使う物を作る
労働者の賃金と待遇を高め

失業者と病者を力の限り援助し
治療し蘇生させるのが第9条だ

10. われらを援助する国と民族
緊密に連合して一つになり
敵に与する奸悪なブルジョア
全て反対するのが第10条だ

『祖国光復会10大綱領歌』は発表されるやいなや広範な大衆の心をとらえた。

非識字者でも10節まで一度や二度聞けば、朝鮮革命の当面の目的と闘争課題をはっきり認識することができ、歌いやすいので誰もがその場で歌を覚えた。

歌詞の革命的内容に共感して農民たちは草取りをしながらこの歌を歌い、鉱山や伐採場の労働者もよくこの歌を歌った。

朝鮮人民革命軍の隊員は、問答式学習コンテストにこの歌謡を含めて広く歌った。

みながこの歌を歌いながら祖国光復会10大綱領の真意を肝に銘じ、祖国解放の聖戦にこぞって立ち上がった。

信念を抱かせた歌謡

1938年12月初め、金日成主席は朝鮮人民革命軍の主力部隊を

率いて濛江県南牌子から長白県北大頂子に至る苦難の行軍を始めた。

朝鮮人民革命軍の隊員たちは、食糧を切らして飢えに耐え、睡眠も休息もまともに取れずに行軍を続けていた。

それに、しつこく追撃してくる敵と交戦しながら行軍したため、隊員たちは疲れ果ててばたばたと倒れる始末だった。

そんなある日、年少の一人の隊員は山の傾斜を登っていた途中、力が尽きて倒れてしまった。

直ちに起き上がれなければ全身がそのまま氷塊に固まるところだった。

彼は声を上げてでも隊員たちの助けを乞おうとしたが、喉から声が出なかった。

時間が経って彼が意識を取り戻したときには、主席の背中に負ぶさっていた。

彼は申し訳なく思って急いで主席の背中から下りようとしたが、主席は、正気に返ったから力を出せと言って彼をしっかり背負った。

彼がかろうじて頭をもたげて前方を眺めると、吹雪の中で互いに頼り合い、助け合いながら一歩一歩前進する隊員たちの姿がおぼろげに見えた。

やっとの思いで這っていく隊員もおり、気を失い倒れていくら呼んでも反応のない隊員もいた。

まさに、そのときだった。

しばらく歩みを止め、深い雪の中で辛苦している隊員たちを見回

していた主席は、静かに歌を歌い始めた。

民衆の旗　赤旗は
戦士の屍包む
屍硬く冷える間に
血潮は旗を染める
……

その瞬間、年少の隊員は目の覚めたような気がした。

そして全身に力が沸いた。

主席の歌は気力が尽き果てて喘いでいた隊伍全体に活力を与えた。

倒れていた隊員たちが一人、二人と立ち上がって隊伍に加わった。

先に警護中隊の隊員たちが一緒に歌い始め、ついで隊伍のみんなが歌った。

歌声は大きくなかったが、苦難の前で屈せず、主席に従って赤旗を守ろうとする隊員たちの意志がそのまま脈打っていた。

年少の隊員も一緒に歌おうとしたが、唇が凍りついて声が出なかった。

主席はもう少し辛抱するんだと言って、雪で彼の唇をこすってやった。

ようやく口が開けるようになったその隊員は、どもりながら歌を歌った。

敵との血戦で
旗を捨てた者誰だ
……

主席はそんな彼をしっかり抱きしめ、この難関を乗り越えよう、われわれがここで倒れれば祖国がいつまでも立ち上がれないと言った。

そして、われわれの進む道が険しくて困難であっても、祖国とつながっている聖なる道だ、革命に立てた誓いを忘れず、祖国解放の日を早めるために力強く戦っていこうと言った。

労苦や過労といえば、主席がどの誰よりも大きかった。

隊伍を率いて隊員よりよけいに歩き、隊員に気を配って夜もよけいに明かし、隊員のためを思ってよけいに飢えをしのがなければならなかった。

しかし主席は、祖国と人民の運命を考えて隊員たちを立ち上がらせ、祖国解放の日を早めるために行軍を続けた。

樹林の中に響いた追悼歌

金日成主席にとって一人一人の遊撃隊員は革命の貴重な元手であり、愛する同志だった。

それゆえ主席は、彼らが不幸にあったり犠牲になったという悲報に接するたびに限りない悲しみに沈んだ。

1939年12月のある日、六棵松戦闘を指揮していた主席は、呉仲洽連隊長が戦死したという思いがけない報告を受けた。

この日、連隊を率いて敵の兵営に攻め入って戦闘を指揮していた呉仲洽は、地下の砲台からの敵の凶弾に致命傷を負い、息を引き取る最期の瞬間に「諸君、司令官同志の命令をあくまで実践できずに死ぬのを残念に思っていたと司令官同志に報告してくれ。……」という言葉を残して戦死した。

主席は、直ちに敵の砲台を制圧し、敵兵を一人残らず掃滅せよと命令した。

朝鮮人民革命軍の隊員は容赦なき復讐戦を展開して敵をまたたく間に撃ち倒し、六棵松戦闘を輝かしい勝利をもって締めくくった。

しかし、愛する戦士を失った主席の心痛がこれで癒されるわけにはいかなかった。

主席は、戦士の屍をかついでいく行軍隊伍に従って歩きながら非常に悲しんだ。

あれほど忠誠心が高く、勇敢で快活な性格の革命戦士を、寒風が吹きすさぶ異国の広野に埋めなければならない主席は、胸がつぶれる思いがした。

主席は、日当たりのよい場所を選んで呉仲洽を丁寧に埋葬し、追悼会を開いた。

主席が自ら追悼の辞を述べた。

困難かつ聖なる革命の道に残した呉仲洽の偉勲と功労を高く評価し、彼が達成できなかった革命偉業を必ず成し遂げることを

訴える主席の追悼の辞の一句一句は、悲哀に沈んでいる隊員たちの心を強く揺さぶった。

みながこみ上げる悲しみを抑えながら『パルチザンの追悼歌』を歌った。

1. 胸を抱えて木の下に　倒れた革命軍
胸から流れる血　青い野原を濡らす

2. 遠い故郷に　父母兄弟を残して
一本の木の下に　恨みを抱いて倒れた

3. 山のからすよ　屍見て鳴くな
身は死んでも　革命精神生きている

追悼歌の悲壮なメロディーが樹林の中に重く響いていった。

葬儀は終わったが、悲しみに沈んだ隊員たちは動こうとしなかった。

主席は、みな力を出して悲しみに耐えようと励ました。

主席の切々たる言葉に隊員たちは、犠牲になった戦友の志を継いで、革命が勝利する日まで一身をささげて戦う決意を固めた。

建国の日々に

不滅の頌歌に秘められた話

解放の日を迎えた全国は、感激と歓喜で沸き立った。

解放された祖国で国の主人となり、新しい生活を始めた人民の幸せと喜びはこの上なく、人民の心の中には金日成主席への限りない敬慕と感謝の念が満ちあふれていた。

全国の津々浦々では「朝鮮人民の英明な指導者金日成将軍万歳！」の歓声が高らかに響き渡った。

主席への感謝の念を込めて声を限りに万歳を叫び、詩もつくり、手紙も寄こしたが、人民の感謝の気持ちは尽きることを知らなかった。

人民は主席の恩恵を思う存分歌い、子孫万代に末永く伝える頌歌を切実に求めていた。

全国各地の各階層の人々から切なる願いが込められた手紙が寄せられた。

その中には、手紙だけでなく、真情を込めて歌詞や曲をつくって寄こした人々もした。

頌歌の創作は、かつてなかった大衆挙げての活動として展開されていた。

1946年5月のある日、抗日革命闘士の金策は、抗日の女性英雄

金正淑女史を訪ねてきて、宣伝隊を率いて地方に出かけていた一人の幹部が頌歌の創作を求める請願を持って上京したことを話した。

彼は、革命頌歌の創作を早急に実現させるべきだと付け加えた。

女史は彼の決心を全面的に支持し、頌歌を立派に創作するようにしようと強調した。

金策は、確信を持ってしっかりやってみると言い、もどかしい心境を込めてこんな話をした。

ある日、彼は頌歌の創作に関する問題を金日成主席に報告した。

すると主席は、あなたまでそんなことを言うと本当に困ってしまう、私の気持ちをよく知っているのもあなたであり、このようなときに私を助けるべき人もあなたではないかと言った。

金策の話を聞いた女史は、山中で戦っていたときから金日成将軍の頌歌をつくって歌おうと努力したが、将軍が厳しく制止するのでそれができなかった、今考えてみると残念でならないと言った。

そして、われわれが将軍の承諾を待っているだけでは10年、100年が経っても頌歌をつくることができない、早く頌歌の創作を始めようと励ました。

金策は女史の激励から大きな力を得、一詩人に頌歌を創作する課題を与えた。

詩人は歌詞の創作に情熱的に取りかかった。

その後、金策を通じてその歌詞を読んだ金正淑女史は、これに基づいてさらに完成すれば立派な歌詞になるだろうとし、歌詞に

盛り込むべき内容も具体的に教えた。そして主席が自らつくった歌をはじめ100余編の革命歌謡が入っている歌謡集を詩人に渡すようにした。

歌詞が一応完成されると、詩人は女史の指導を受けたいと思った。

詩人に会った女史は、歌詞の創作に助けになるように山中で戦っていたときの話を聞かせ、ひたすら国の独立と人民の幸福のために全てをささげている金日成将軍の偉大な足跡はわが国のどこにも印されています、その足跡は白頭山の険しい山なみと鴨緑江と豆満江の流れにも印されています、また解放なったこの国の麗しい山河にも印されています、われわれは満州広野の寒風を切り抜けるときにも、密営の焚き火のそばで長い夜を明かすときにも祖国と人民への将軍の愛を昔話のように語るときが必ずやってくるだろうと確信していました、実に将軍の尊名はわが人民の心の中でとわに光を放つでしょう、と言った。

女史の言葉は、詩人があれほど苦心して探し求めていた革命頌歌の詩想であり、韻律であった。

詩人は嘆声をもらし、女史の言葉をそのまま歌詞に移した。

その後も女史は、何回も歌詞を見、一つ一つ指導した。

歌詞を受け取った作曲家も興奮して短い間に曲を完成させた。

ついに革命頌歌が記念碑的な名曲として生まれた。

しかし、主席が頌歌の創作を厳しく制止したため、視聴会を開くことができなかった。

1946年6月下旬のある日。

主席が重要な会議を終えて部屋から出ると、金策は隣の部屋に待機させていた創作家と芸能人を紹介し、この人たちがつくった歌を一曲聴いてみてほしいと進言した。

こうして意義深い視聴会が主席の臨席の下に行われた。

主席が幹部たちと共に席に着くと、不滅の革命頌歌『金日成将軍の歌』の荘重なメロディーが場内に力強く響き始めた。

1. 長白の山なみ　血に染めて
鴨緑の流れを　血に染めて
自由朝鮮　きずくため
戦いきたりし　そのあとよ
ああ　その名もゆかし　金日成将軍
ああ　その名も高き　金日成将軍

2. 広野の吹雪よ　語れかし
密林の長き夜　告げよかし
不滅のパルチザン　そは誰ぞ
絶世の英雄　そは誰ぞ
ああ　その名もゆかし　金日成将軍
ああ　その名も高き　金日成将軍
……

視聴会の参加者はみなこみ上げる感激を抑え、主席を仰ぎ見ながらその言葉を待った。

しばらくして主席は、立派な歌だ、曲も気迫があり活力に満ちている、しかし歌を普及しては絶対にならない、と念を押した。

でも、翌日から『金日成将軍の歌』は、人々に大きな感激と歓喜を与えながら全国の津々浦々に響き渡った。

20年ぶりに故郷に帰って

1945年10月14日、金日成主席は祖国凱旋を歓迎する平壌市民集会で、全人民に凱旋演説を行ってから、懐かしい故郷―万景台へ向かった。

主席の帰郷を今か今かと待っていた万景台の人々は歓呼の声を上げながら出迎えた。

祖母など一家の人たちが主席の胸に顔をうずめ、感涙にむせんだ。

「お祖母さん、その間お元気でしたか」

主席は静かに頭を下げて挨拶した。

祖母はチマの裾で目尻を押さえ、詰まった声で言った。

「お前を見ると、積もりに積もった一生の苦悩が吹っ飛んでしまったようじゃ！

……ところが……父さんや母さんをどこへ残して一人で帰ってきたんだい……どうして一緒に帰れなかったんだい……」

主席は祖母の言葉に答えられず、忘れがたいご両親への思い出にふけって部屋の中を見回した。

祖父は孫の心痛をほぐすかのように主席の手を取って撫で、話題を変えた。

「解放なって本当にうれしい。……お前の父さんや母さんもあの世でいたく喜ぶだろうじゃ！」

祖母は笑みをたたえ、頼もしげに孫の姿を眺めた。

そのうち、人々は主席の生家の内外をぎっしりと埋め、家中は喜びに満ちた笑い声で賑わった。

やがて、簡素な祝宴が催された。

主席は祖父と村の年寄りたちの杯に手ずから酒を注いだ。

主席が注いだ酒杯を受け取った叔母は、このめでたい席を共にできなかった康盤石女史を偲び、酒は飲めないからその代わり歌を歌うと申し入れた。

幼い主席を抱いて寝つかせるときに両親が歌った『子守歌』であった。

ねんねんわが子よ　ねんねんいい子よ
ねんねんわが子よ　ぐっすり眠るんだ
親戚には和睦童　父母には孝子童
愛あり掌中の珠　ねんねん
……

息子が国の英雄に育つことを懇願して康盤石女史が歌った『子守歌』のメロディーは村人に深い感銘を与えた。

20年間、待ち焦がれていた主席と席を共にして次から次へと続く感激的な話、喜びにあふれる歌と踊りで部屋と庭が賑わう中、万景台の夜は更けていった。

電話で教えたこと

1946年の春のある日。

金日成主席が夕食を取っているとき、スピーカーから女性の美しい歌声が流れ出た。

その歌に耳を傾けていた主席は、歌が終わると、箸を置いて立ち上がった。

そして一幹部に電話をかけ、ただいまスピーカーから出た歌は誰が歌ったのかと聞いた。

ある学校の女教師であるという答えに主席はすこぶる満足して言った。

――女教師の歌が立派です。われわれが求めるのは、他ならぬこのような歌です。非常に健全な歌です。

新しい朝鮮の建設に決起したわが人民の心情をそのまま表した歌です。声もよく、明朗で、活気にあふれていて本当に素晴らしいです。……

放送の関係者にその女教師のような新人の歌を多く放送するように伝えるべきです。

主席のこのような細やかな関心の下に、われわれの大衆文化芸術は春の花園のように開花し、民族文化の新しい地盤を美しく飾った。

解放山に響いた迎春の歌

1949年12月。

幼い金正日（キムジョンイル）国防委員長は、母親の金正淑女史が世を去ってから初めて迎える新春に、どうすれば父親の金日成主席に喜んでもらえるだろうかといろいろ気をつかった。

幼い国防委員長は主席の好む歌と踊りをお見せすることに思いつき、大晦日の夕方、教養員や園児たちをみな自宅に呼んだ。

解放山麓の主席の邸宅には、親戚ばかりでなく幼稚園の教養員と園児、その母親たちが多く集まってきて、国防委員長が作った新春の飾りを見ながらはしゃいでいた。

やがて主席が幹部たちと共に帰宅した。

今か今かと待っていた園児たちが一斉に駆け付けて主席に年始のあいさつをした。

主席は笑顔でそれに応え、思う存分歌も歌い、楽しく遊ぶようにと言った。

子どもたちはうれしくて小躍りした。

迎春集いは、国防委員長がつくったプログラム通り『出席の歌』から始まった。

場内の雰囲気が盛り上がると、国防委員長は席から立って、これから1950年の新春を祝う集いを始めると告げた。

すると、みんなが立ち上がって姿勢を正し、不滅の革命頌歌

『金日成将軍の歌』を合唱した。

次は、国防委員長の紹介で革命歌謡『友だちよ　歌おう』を歌った。

独唱、二人舞、漫才など演目が変わるたびに、主席は真っ先に拍手を送った。

主席が喜んでいると、幼い国防委員長は一層熱情的に歌を歌い、妹も可愛らしく踊った。

実に楽しく、幸せな迎春集いだった。

夜更けまで一切の心配事を忘れたかのように子どもたちと楽しい時間を過ごす主席を仰ぐ国防委員長は人知れず目頭を熱くした。

主席を喜ばせることに、迎春集いを催した国防委員長の目的があり、切なる願いがあったのである。

砲火の中で響いた勝利の歌

朝鮮の芸術は生きている

1950年の秋、人民軍部隊と共に洛東江付近にまで進出して戦闘的な公演を行っていた朝鮮人民軍協奏団の芸能人たちは、一時的な戦略的後退が始まると北上し始めた。

彼らは厳しい行軍と試練に耐え抜き、ついに慈江道雲峰に到着した。

そこに着いて何日か過ぎたとき、彼らは意外にも金日成主席に呼ばれた。

彼らが目的地に到着したのは夕方だった。

彼らを待っていた主席は、一人一人の手を取って温かく迎えた。

主席は、砲煙にくすんだ軍服に目を凝らし、みんなご苦労だったとねぎらった。

そして涙ぐんでいる芸能人たちに、もう公演を見ることにしよう、とやさしく言った。

感激で沸き立つ中、公演の幕が開けられた。

不滅の革命頌歌『金日成将軍の歌』の合唱から始まった公演は、熱狂的な拍手喝采を受けた。

素朴な芸術公演ではあったが、演目が変わるたびに真っ先に拍手を送った主席は、傍らの協奏団幹部に、本当に素晴らしい公演だ、みなよくやった、朝鮮の芸術は生きている、とよく通る声で言った。

公演が終わると、協奏団の指揮メンバーと席を共にした主席は、公演の成果を祝い、皆さんの公演は英雄的な朝鮮人民軍と人民の不屈の精神をそのまま反映していると言った。

そして、新しい戦闘命令を下した。

主席の身に余る称賛と命令を受けた朝鮮人民軍協奏団の芸能人たちは忠誠を誓い、再進撃する部隊と共に昼夜を分かたず戦闘的な公演活動を続けた。

戦勝の春の歌

1951年4月末のある日、元山地区を視察していた金日成主席は竜浦里に駐屯している人民軍部隊を訪ねた。

山麓の農家に立ち寄った主席は、部隊の指揮官と模範戦闘員を呼んだ。

彼らと席を共にした主席は、軍人たちの戦闘談を聞き、教訓になる話もした。

ふと、偵察中隊長が立ち上がり、最高司令官同志の歌を聞かせてほしいと要望した。

主席は朗らかに笑い、それでは一曲歌ってみようかなと言って歌いはじめた。

2月も過ぎて3月が来た

江南からツバメが帰ってくると
この地にもまた春が来る
アリラン　アリラン　アラリヨ
アリラン　江南行こう
……

主席が歌った『懐かしい江南』は、人民軍勇士に勝利の春は必ずやってくるという信念と楽観を与えた。

自ら歌った『思郷歌』

1951年6月下旬のある日。

最前線で英雄的に戦っていた共和国英雄と模範戦闘員たちは、金日成主席の命令を受けて最高司令部に到着した。

満面に笑みを浮かべた主席は、彼らが敬礼する前に手をやさしく取り、肩も叩きながら温かく出迎えた。

「火線の英雄の皆さん、遠いところをご苦労でした。皆さんは勇敢なつわものです」

主席は、前線で戦っている戦闘員たちの健康と彼らの故郷や父母兄弟の安否を尋ねた。

不便な点はないのかと確かめた主席は、彼ら一人一人の名前を呼びながら「アメリカ帝国主義侵略者を掃滅せよ！」という文字と各自の名前が刻まれた自動短銃を贈った。

しばらくして、主席は彼らと夕食を共にした。

喜びと幸せに満ちて食事をしながら乾杯を上げる彼らを眺めていた主席は、皆さんが前線で戦いながら歌った歌を聴いてみようと言った。

彼らは真っ先に『金日成将軍の歌』を合唱した。

そして、座った順番に1人ずつ立ち上がって歌を歌った。

彼らの歌が終わると、主席は、それじゃ私の順番になったねと笑って言った。

そして、抗日革命闘争時期の歌を歌いたいと言って、不朽の名作『思郷歌』を歌いはじめた。

ふるさとをたつ朝　わが母は
門に出て涙ぐみ　「さあ お行き」
その言葉 ああ　耳をうつ
……

座中では拍手喝采が起きた。

主席の歌を聴きながら全ての戦闘員は、祖国と人民のために一命をなげうって戦う誓いを立てた。

救い出された戦時歌謡

1951年6月のある日、金日成主席は創作家たちに戦時歌謡の

創作に関して次のように述べた。

「……作家、芸術家は、作品に抽象的で無味乾燥なスローガンを羅列するのではなく、現実の中の生きた人間の思想と感情、生活を通じて、人民の気高い愛国心を具体的に深く掘り下げて形象化しなければなりません。こうしてこそ、作品に描かれた愛国心が現実そのままの具体性と真実性をもつようになります」

主席の教えを肝に銘じた人民軍協奏団の創作家たちは、1211高地近くの激戦場へ勇躍出かけた。

彼らは、生死を決する激戦場での生活を体験しながら立派な戦時歌謡をつくった。

その中には歌謡『せん滅の歌』もあったが、協奏団からこの題目が歌の内容に合うかどうかという意見が出された。

それで題目を『決戦の道』と改めると、まさにそれが歌の楽想に合うとして賛成した。

みなから名曲だと称えられていたこの歌は、数日後、全面的に否定された。

歌謡『決戦の道』のリハーサルが行われた日であった。

この歌を聞いた朝鮮音楽家同盟の要職にあった人は、なぜこんな悲壮な歌をつくるのか、敵の銃眼をわが身でふさいだ戦友の死を強調したのは軍人たちの悲しみをそそるだけだ、とけちを付けて歌の公演を棄却してしまった。

詩人や作曲家はなすすべを知らず、他の創作家たちも意気消沈していた。

それから数カ月後のある日、一幹部が人民軍協奏団の活動家と創作家たちを呼んで歌謡『決戦の道』について聞いた。

協奏団の団長から歌が棄却された経緯を聞いたその幹部は、前線から届いた幾通もの手紙を取り出した。

彼の話によると、兵士たちは戦場に出るときや敵を撃退する激戦で歌謡『決戦の道』をよく歌い、この歌をつくった詩人と作曲家に感謝を伝えることを頼んだということであった。

こうして歌に公演の道が開けたが、これを棄却した人の態度は依然として頑固で冷淡であった。

いったん問題視されていた歌なので、協奏団でも慎重を期さざるを得なかった。

実際、この歌は公式に普及されたものではなかった。軍部隊の宣伝活動家たちが平壌への出張時に人民軍協奏団に立ち寄って新しい歌が創作されたことを知り、楽譜を書き写していったのが一人、二人を経て急速に各戦線部隊に広まったのである。

この歌が人民軍の戦士たちによく歌われていることに勇気づけられた協奏団の芸能人たちは、歌謡『決戦の道』を合唱と管弦楽で形象化した。

1952年2月のある日の晩、牡丹峰地下劇場で金日成主席の臨席を得て幕を上げた音楽・舞踊公演ではこの歌が高らかに響き渡った。

硝煙けむる　あの丘に
たおれた同志　忘れるな

かえらぬ戦友の　復しゅうを
敵陣ふかく　突撃だ
マンセーマンセー　こえ高らかに
敵の銃眼くだいて　すすめ
敵の銃眼くだいて　すすめ
すすめ戦友よ　敵を打て
……

公演が終わると、金日成主席は幹部たちに、人民軍協奏団が軍隊の特性に即して立派な公演を行った、合唱『決戦の道』は初めて聞く歌であるが、歌詞もよく、曲もよい歌だと高く評価した。

革命的な悲壮感は、胸の痛む犠牲や難関を前にしても悲しみを不屈の意志と勇気に変え、侵略者を撃退する戦いへ一層果敢に奮い立たせる崇高な感情である。

歌の評価を公正にするためには、当然、革命的な悲壮感の本質を中心に据えて議論すべきだったが、頭から悲哀だの、哀愁だのとレッテルを貼り付けるので誰もが口をつぐんでしまったのである。

金日成主席だけはこれらを鋭く見抜き、いつまでも埋もれるところだった歌謡『決戦の道』を救い出したのである。

こうして、戦時歌謡『決戦の道』は全前線にわたって強く響き渡るようになった。

戦火の中で迎えた誕生日

1952年4月15日は、戦火の中で2番目に迎える金日成主席の40歳の誕生日に当たる日である。

朝鮮人民軍軍楽団はこの意義深い日に金日成主席の臨席を得て公演を行うべく、最高司令部へ向かった。

人民軍軍楽団の芸能人たちが到着したという報告を受けた主席は、自ら玄関先にまで出て彼らを温かく迎えた。

彼らを部屋に通した主席は、食卓を指しながらみんな座って食事をしようと言った。

誕生日を迎える主席を祝賀するのが戦士たちの道義というのに、主席は彼ら一人一人の杯に酒を注いでやり、料理も彼らの近くに押しやりながら、どうぞ遠慮なく上がるようにと勧めた。

主席は箸を取れずにいる芸能人たちに年齢と故郷、父母兄弟の安否をいちいち尋ねた。

そして一幹部を呼んで、一緒に座って歌を鑑賞しようと言った。

しばらくして、公演が始まった。

女性歌手がアコーディオンの伴奏に合わせて不滅の革命頌歌『金日成将軍の歌』を歌った。

主席は抗日の血戦万里の道を踏み分けたその日々を思い浮かべるかのように、深い思索にふけって歌を聴いた。

主席は演目が終わるたびに真っ先に拍手を送り、声楽も器楽演奏も上手だと褒めた。

やがて公演が終わり、みなが席に戻ったときだった。

主席は戦争で勝利する日も遠くないとし、当面の軍事・政治情勢について説明した。

しばらく後、話題を変えて芸能人たちが今どういう楽器を利用しているのかを聞き取った主席は、軍楽団の皆さんは宝である、皆さんは軍服を着た芸能人としての栄誉と誇りを胸に秘め、学習に励んで人民に奉仕する演奏家にならなければならないと言った。

そして、前線で戦っている戦闘員を鼓舞する公演活動を活発に行う問題について具体的に述べた。

主席の言葉が終わると、芸能人たちはみな立ち上がり、主席の健康を祈る心を込めて『金日成将軍の歌』を合唱した。

歌が終わると、主席は芸能人たちの手をやさしく取り、「今夜、軍楽団の皆さんがやってきて私を祝ってくれて感謝します。ご苦労さんでした」と言った。

誕生日を迎える主席を祝賀すべく訪ねて来た芸能人たちは、かえって主席の温情を受けて感激に喉を詰まらせた。

主席は玄関の外に出て芸能人たちを乗せた車が見えないときまで見送った。

そのときはもう12時が過ぎた深夜であった。

長山里のオルガンの音

1952年6月下旬、金日成主席は平安北道竜川郡長山里を訪ねた。

この日、村では田植えの状況を総括し、草取りを早く終えるための会議が行われていた。

村に到着した主席は会議場へ直行した。

静かに戸を開けて部屋の後ろ手に座った主席は、報告と発言を聞いていたが、誰もそれを知らなかった。

休憩時間になって主席が会議室にいることに気づいた細胞委員長をはじめ党員たちはみな驚き、ただただ感激するのみだった。

笑みを浮かべて党員たちを見回していた主席は「今は休みの時間でしょう。外に出て風にでも当たりましょう」と言った。

党員たちは主席の後について外に出た。主席は手を後ろに組んで、ゆっくりと庭を歩いた。

このとき、宣伝室からオルガンの音が静かに流れ出し、続けて女性たちの朗らかな歌声が聞こえた。

白頭の峰につるが舞いおり
解放の祖国に　かっこう　ポックポック
ああ　将軍がくれた土地

エルファ　デルファ　足どり軽く　畑へゆこう
……

会議室の隣の宣伝室で女性たちが休みの時間に歌っていたのである。

歌声に耳を傾けていた主席は歩みを止め、オルガンを弾いている女性が教員なのかと静かに聞いた。

農民だという答えに主席は、サークル員ですね、と言った。

戦う朝鮮、英雄的人民の英知と意志を感じさせる歌声だった。

宣伝室では続けて『祖国防衛の歌』が歌われ、それはすぐ合唱になった。

歌が終わると主席は、会議を続けようと言った。

その夜、主席の指導の下に会議が続けられた。

その日から14年の歳月が流れた1966年8月のある日、再び長山里を訪ねた金日成主席は、戦争時期にこの村を訪ねたときのことを感慨深く振り返った。

そして幹部たちに、今も党員たちがよく歌を歌うのか、当時の民主宣伝室長とオルガンを弾いていた女性は健在でいるのか、と尋ねた。

一幹部が、今も党員たちはよく歌を歌っているが、残念ながら彼らは病気で亡くなったと答えた。

顔色を曇らせてゆっくりと庭を歩いていた主席は、幹部たちにこう語った。

――ここの党員たちは立派な人たちでした。彼らは会議に来てオルガンを弾き、歌もよく歌いました。

歳月が流れても、長山里の人々は村にまつわるこの話を伝説のように語り続けている。

戦時につくられた建設の歌

祖国解放戦争勝利の日が近づいていた年の春のことである。

牡丹峰地下劇場では金日成主席の臨席の下、メーデー慶祝公演が行われた。

公演舞台には革命歌謡、戦時歌謡など戦闘的な作品が次々と上がった。

ところが、演目の紹介者が舞台に出て「次は合唱『建設の歌』です」と言うと、戦争たけなわなのに建設とはなんだろうと、観衆は驚いた。

舞台では合唱団の雄々しくて興趣をそそる歌が始まった。

歌を聴く観衆の目の前には、勝利した祖国で繰り広げられる壮大な復興建設の様子が見えるようであった。

主席は素晴らしい公演を行ったと称え、幹部たちに文学・芸術作品の創作について話した。

ところがこのとき、復古主義に染まっていた人が『建設の歌』を正面から反対するのがはばかれたためか、この歌に「オギヨン」という単語があまりにも多く、雑然としていると難癖を付けた。

主席は彼に向かって断固たる語調で言った。

——かまわない。『建設の歌』は適時に創作された。常に芸術はこのように人民の希望と志向を歌うべきだ。……この歌はわが人民に勝利の信念を抱かせるよい歌だ。

そして、歌が楽天的であり、民族的な色彩が濃いのがよいと評価した。

その後、勝利した朝鮮では『建設の歌』が力強く響き渡った。

創造と建設も歌と共に

慣例となった迎春集い

1958年の新年を迎えて、平壌市の子どもたちの迎春集いが大同門映画館で行われた。

午後７時、「万歳！」の歓呼の中、金日成主席が行事場に到着した。

嚠喨たるラッパの音とともに、小舞台の幕が開け、ウサギとオンドリに扮した子どもたちが登場し、主席の前で可愛らしく踊った。

楽しい踊りの輪を観ていた主席は、子どもたちが心ゆくまで踊り回るにはこの大同門映画館があまりにも狭過ぎると言い、新しい宮殿があればいいじゃないかと子どもたちに聞いた。

新しい宮殿があれば本当にうれしいと喜んでいる子どもたちを見回していた主席は、同行した幹部に、われわれが山中で戦っていたときには不足するものが多くて仕方なかったが、今はできないことがあろうか、今後立派な新しい宮殿を建ててやろう、と言った。

子どもたちは手を叩き、小躍りしながら喜んだ。

幸せそうに踊り回る子どもたちを満足した顔で眺めていた主席は、私は少年団員たちと共にいるときが一番幸せだ、これからは

少年団員たちと一緒に新年を迎えることにしよう、と言った。

『迎春の歌』の伴奏が映画館のホールに割れんばかりに響き、子どもたちの踊りは高潮に達した。

主席は子どもたちの踊りから目を離さずに言った。

――わが国では子どもたちが王様です。われわれの可愛らしい花つぼみのような子どもたちに新しい宮殿を建ててやりましょう。一番よい所に、一番大きく、一番高く建てましょう。

この日、子どもたちはこの一年間に知・徳・体を兼ね備えてきた誇りと新しい年の決意を込めて高らかに歌った。

迎春集いが終わると、主席は、形式も新しく、演目も多様なのがよい、この迎春集いを観て頭がすっきりする、と言った。

このときから主席は、平壌市学生少年の迎春集いに毎年欠かさず出席した。主席の臨席を得た迎春集いは、一年を締めくくり、新しい年を迎える意義深い行事として慣例化した。

ほめられた独唱歌手

1958年2月のある日の夕方、国立芸術劇場では金日成主席の臨席の下、中華人民共和国の周恩来総理を歓迎する音楽・舞踊総合公演が行われた。

真っ黒い燕尾服を着て歌っている独唱歌手に目をこらしていた周恩来総理は、顔に笑みを浮かべて彼を指差した。

そして金日成主席に、自分はあの俳優を覚えている、中国に

来たとき、歌劇の王子役を演じて中国人民に深い印象を残した俳優だと言った。

朝鮮の芸術団が中国に行って公演した歌劇『コンジとパッジ』を念頭においての言葉であった。

王子役を演じたという彼は、主席もよく知っている国立芸術劇場(当時)の歌劇俳優であり、独唱歌手であった。

歌手を満足げに眺めていた主席は周恩来総理に、あの人はわが国の声楽界で中核的な俳優で、今まで歌劇の主人公役をほとんど独りで演じている、解放後、独唱歌手として人民に広く知られている功労のある人だ、と答えた。

主席が高く評価した通り、その日も彼は歌を上手に歌った。

歌謡『栄光の地―普天堡』を歌ったテナー独唱歌手は、続けて中国歌謡『高い太子山』を歌った。

歌に耳を傾けていた周恩来総理は、感動した語調でまた主席に、歌手が大変印象深く立派に歌を歌う、発音が正確で、感情も豊富であると言った。

主席はそれにうなずき、歌が終わると一番先に拍手を送った。

中国人たちも熱烈な拍手を送り、場内で大きな拍手喝采が上がった。

その後、「抗米援朝保家衛国」の旗の下に祖国解放戦争に参戦し、第2次で帰国する中国人民志願軍を歓送する芸術公演が行われるときだった。

その日も、例のテナー独唱歌手はまず我が国の民謡を歌い、次いで中国歌謡『高い太子山』を歌った。

金日成主席は、あの歌手は戦争時期に前線に出て慰問公演も多くし、1951年度には中国を訪れて公演した俳優だ、この2月に周恩来総理が訪朝した際も、あの歌を歌って中国の人々を喜ばせた、と言った。

すると、志願軍司令部の一代表は金日成主席に、朝鮮の歌手が中国人に劣らず中国の歌謡をよく歌うと感嘆し、中国の人々はあの歌を聴くと毛沢東主席への信頼が強まると答えた。

金日成主席は、中国歌謡『高い太子山』は毛沢東主席を称えた歌であるが、わが国の歌手が中国歌謡を上手に歌って中国の人々を喜ばせたのは大変よいことだとすこぶる満足した。

契機と機会のあるたびに、金日成主席からほめ称えられたテナー独唱歌手は、行く先々で人々から熱烈な歓迎を受けた。

車の中で歌った信念の歌

1958年4月のある日、降仙製鋼所(当時)を訪ねた金日成主席は、工場の労働者たちを新たな革新へと奮い立たせた後、夕暮れに製鋼所を後にした。

主席の乗用車は首都平壌に向かって走った。

しばらく時間が経ってからも、主席は降仙製鋼所で受けた衝撃のためか深い思いにふけっていた。

やがて同行していた一幹部に、この頃仕事が苦しくないのかと尋ねた。

その幹部は、金日成同志が手取り足取りして教えてくださるので、いくら仕事が多くても疲れを知らないと答えた。

すると主席は、骨が折れるだろう、今日降仙製鋼所に行って労働者たちが働くのを見ると、山中で戦っていたときのことが思い出されるとし、日本軍の包囲のため、厳しい冬のさなかにテントを張ることも、焚き火をたくこともできずに撫松で冬を過ごした時のことを回想した。

そして、あのときに比べると、今われわれが直面している困難は厳しいとは言えない、今、われわれの幹部はそのような試練を経験したことがないので、わずかな困難を前にしても動揺している、特に試練を経ていない知識人の中でそのような傾向が濃厚である、われわれが山中で戦っていたときには知識人も立派に戦った、今の知識人は必ずその模範に見習うべきだ、と言った。

主席は苦難に満ちた抗日革命闘争の日々を振り返るかのように、しばらく窓外に目をやってから静かに歌を歌いはじめた。

民衆の旗　赤旗は
戦士の屍包む
屍硬く冷える間に
血潮は旗を染める
……

歌声は高くなかったが、主席の心中が察せられて幹部の胸は熱くなった。

当時、情勢は一触即発の状態にあった。

アメリカ帝国主義とその追随勢力の反共和国騒動と新たな戦争挑発策動、修正主義者の反革命的策動、これに便乗した反党反革命分子の陰険な挑戦……

このような厳しい試練が重なる中でも、金日成主席は動揺せず「卑怯な者去らば去れ、われらは旗を守る」という『赤旗の歌』を力強く歌いながら敵のあらゆる攻勢を粉砕し、朝鮮革命を勝利へと導いた。

小麦畑で響いた歌声

1958年6月のある日、金日成主席は黄海南道の一農場を視察した。

畑地灌漑システムを確立するという主席の教えを体して、ここの農場員たちは小麦畑とトウモロコシ畑に溝を掘り、水を十分引いた結果、この年に例年にない作柄をもたらした。

よく実った小麦畑とトウモロコシ畑を見て回って満足した主席は、他の小麦畑にも行ってみようと言った。

そうして農場の幹部たちは主席と共に他の畑に足を運んだ。

果てしなく広がって波打つ小麦畑、この畑でこのように作柄が上々だったのはこれがはじめてだった。

組合員たちが仕事の合間に踊りの輪を繰り広げていた。

広大な小麦畑を見回した主席は、小麦の上出来でみんなが喜んでいるね、本当に気分がよい、これまで多くの農村を見て回っても、これほど気分のよいときは少なかったと喜びに満ちて語った。

主席はじくじくした小麦畑に入って、見事に実った小麦の穂をさわってみ、たいそう満足した。

――小麦の作柄が上々なので、向こうの村の家々がよく見えないほどだ。……これはまさに畑地灌漑システムの導入によって収められた大きな勝利だ！

このとき、村の裏の谷間から仕事の合間に歌う若者たちの楽しい歌声が風に乗って聞こえてきた。

オンヘヤ
村の畑に豊作だ　オンヘヤ
麦作もオンヘヤ
トウモロコシもオンヘヤ
主席がもたらした豊作だ　オンヘヤ

終始微笑を浮かべて彼らの歌を終わりまで聞いた主席は豪快に笑い、随行幹部に畑地灌漑を一層積極的に推し進めるよう指示した。

それから数カ月後の1958年9月に開かれた党中央委員会総会では、畑地灌漑システムの確立を大衆あげての運動として展開するという決定が採択され、「全ての力を100万ヘクタールの灌漑面積の拡張へと！」というスローガンが提示された。

農業も豊作！　芸術も豊作！

1961年の新春を迎えて金日成主席は、大規模の全国農村芸術サークル祭典を開催するようはからった。

祭典の準備をはじめから細心に指導した主席は、一度に2組ずつ合同公演を行う方法で総合公演を行い、一人でも多くの芸術サークル員が出演して経験を分かち合うようにした。

同年3月のある日、祭典の最後の総合公演を観覧した主席は、祭典準備メンバーたちを呼んだ。

主席は、その間ご苦労だったとして彼らに席を勧め、満足した口調で言った。

「公演は素晴らしいものでした。農民たちは営農ばかりでなく、芸術サークル活動も上手です。わが国は農業も豊作であり、芸術も豊作です。

私は、全国農村芸術サークル祭典が立派な成果を収めたことを非常に満足に思い、祭典に参加した全ての芸術サークル員を熱烈に祝います」

感激している幹部たちを見回した主席は続けた。

「今回の全国農村芸術サークル祭典を準備する過程で農村芸術サークル員が数十万人に増えたそうですが、それは実に素晴らしいことです。数十万人の農村芸術サークル員が育ったのは、今後、農村で大衆芸術を速やかに発展させうる強固

な土台となります。芸術は大衆の中に根を下ろし、大衆の知恵に依拠してこそより早く発展することができます。わが国の芸術があれほど早く発展しているのは、広範な大衆をその源としているからです」

主席は、全人民がこぞって芸術サークル員になっても差し支えないと満足を示し、これまでの農村大衆芸術の発展における全ての成果は、わが党の芸術活動の大衆化、日常化の正当な方針と賢明な指導によってもたらされたものだと述べた。

そして、今後農村で大衆芸術をさらに発展させるための綱領的な課題を提示した。

金日成主席の遠大な構想と関心の下、わが国の社会主義農村では大衆芸術活動が活発に繰り広げられた。

合唱曲になった洞簫曲

1961年3月初め、全国農村芸術サークル祭典の参加者と席を共にした金日成主席は、大衆文化芸術をさらに発展させる方針を示しながら、民族音楽を多く発掘するよう指示した。

「民族器楽合奏『シンアウ』は昔の曲ですが、非常に立派なものです。この曲を聴いていると勝利の曲を聴く気分になり、勇気づけられます。いつ、誰によってつくられたものかは分かりませんが、愛国的感情をよく反映した立派な軍歌です。昔、われわれの先祖はこの軍歌を歌いながら侵略者を

打ち破る戦いで、英知と勇猛を馳せたのでしょう」

1カ月後、咸鏡南道を現地指導する際には、この『シンアウ』が多く歌われている地方の人民と語り合いながらよい歌だと評価した。

そして、歌詞に盛り込むべき革命的な内容に触れ、『シンアウ』を編曲して舞台に乗せる課題を与えた。

1962年3月、主席の臨席の下に平壌市の芸能人の総合公演が行われた。

芸能人は『革命のために』(『シンアウ』)を合唱した。

アハー　侵略者を打とう敵を打とう
パルチザンの勇敢な闘士
侵略者を打ちのめした

エヤ―ヘ―　赤旗なびく赤旗なびく
闘士の革命精神を受け継いだわれわれだ

単調な洞簫曲が荘重な合唱曲となって劇場を揺るがした。

歌が終わると、万雷の拍手が鳴り響いた。

主席は大変素晴らしい作品だとほめ称え、民族楽器で行進曲を演奏できないという法はない、『革命のために』は洋楽器より民族楽器で演奏するのがよい、この歌を聴くと馬を駆るように浮き浮きし、意気込んで敵を打つ力が沸く、この歌は革命歌謡に属する、と述べた。

洋楽器は近代楽器、朝鮮民族楽器は古い楽器と言っている一部の

人の誤った見解を指摘した主席は、民族楽器を引き続き改良し、音楽において主体性を確立すべきだと強調し、洋楽器を朝鮮歌謡に服従させなければならないと教えた。

そして、民族音楽で復古主義的な傾向を徹底的に排し、『革命のために』のように人民の感情に合い、大衆的で、朝鮮革命の前進に資する音楽を創作することについて強調した。

消え去ったセックソリ

1962年3月のある日、牡丹峰劇場では金日成主席の臨席の下、平壌市の芸能人の総合公演が行われた。

さまざまなスタイルの音楽芸術作品が舞台に乗せられた公演は夜10時になって終わった。

公演が終わると、主席は幹部と創作家たちを休憩室に呼び、総体的に今わが国の音楽は正しい方向へ進んでいるとし、上演された作品を一つ一つ評価した。

主席は、わが国の音楽はあくまでも朝鮮人の感情に合わなければならない、そのためには人民が理解できる民族的旋律を基調にして音楽を発展させなければならないと言った。

そして、パンソリ(語り歌)は人民に喜ばれず、特に青年に嫌われているとし、次のように言った。

――朝鮮の旋律を基本としながらも復古主義に走ってはなりません。

実際、そのとき一部の人は時代遅れのセックソリ(だみ声)を民族的旋律に合う伝統的な発声法だと思い込んでいた。

このような実態をつぶさに確かめた主席は、わが国の音楽の発展に害を及ぼしていた復古主義的傾向に決定的な打撃を加えた。

そして、民族音楽を近代化するためには、セックソリに合うようになっている民族楽器も改良すべきだとし、具体的な方向と方途を示した。

こうして、わが国の音楽に残っていたセックソリは消え去るようになった。

新しく生まれた『朝鮮人民軍歌』

解放後、わが国には軍歌として歌われていた『人民軍行進曲』という歌があった。

その歌の欠点を見極めた金日成主席は、軍歌をつくり直すようにした。

1966年4月のある日、作曲家と関係部門の幹部たちを呼んだ主席は、現在の『人民軍行進曲』は曲がよくないとし、人民軍歌を新たにつくらなければならないと言った。

続けて、人民軍歌は革命的気迫があり、はつらつとしたものでなければならない、その歌を歌えば、いまにも突進したくなるようなものにしなくてはならないとし、軍歌はほかならぬ革命歌謡のようなものにならなければならないと言った。

しばらくして主席は、幹部たちに創作中の幾つかの曲を録音したものを聴いてみようと言った。

それらの歌は主席の指示に従って1965年からつくりはじめた歌であった。

主席はすでに創作家たちを呼んで軍歌を新たにつくるように課題を与えたのである。

そうして創作された歌謡の中から選ばれた4曲が次々と室内に響いた。

その中の2曲を再び聴いた主席は、歌の曲がよくできていないと指摘した。

そして慎重な面持ちで、次のように言った。

「人民軍歌は舞台用の曲とは違ったものでなくてはなりません。さきほどわれわれが聴いた曲は、伴奏と演奏が舞台用の形式になっているせいか、いずれも舞台用の曲のようで、歌いにくそうです」

主席は、創作家たちが軍人の中に入って数カ月間、生活体験をしながら軍歌をつくるよう指示した。

金正日国防委員長は、朝鮮人民軍協奏団の作家で創作チームを組み、1211高地が見える一区分隊に出向いて兵士生活をしながら歌詞をつくるようはからった。

こうしてまた数編の軍歌が創作された。

1967年9月初めのある日、録音された3曲の歌が主席に届けられた。

歌を聴いてみた主席は、その中の一曲を挙げて歌のリフレイン部分は申し分ないが、前の部分の曲が難しく、混合拍子になって

いるので歌いにくいだろうと言った。

そして自責している幹部たちに、もう少し頑張れば立派な歌をつくれると励まし、一区分隊に歌を普及して兵士の意見を聞いてみて改作するようにした。

主席の教え通り一曲の歌が完成された。

そうして主席の臨席の下に平壌大劇場の舞台では、新たにつくられた『朝鮮人民軍歌』が力強く響き渡った。

抗日の輝かしい伝統を継ぎ
栄光に輝く鋼鉄の隊伍
金日成元帥の赤い戦士として
社会主義祖国を守りぬく
進もう一当百の勇敢な朝鮮人民軍
帝国主義侵略者残らず打ちのめそう
……

公演が終わり、協奏団の幹部たちを呼んだ主席は満面に笑みをたたえ、つくり直した人民軍歌がそのぐらいなら結構だから、全軍に普及して意見を聞いてみるように指示した。

そして次のように尋ねた。

「兵士たちがあの歌をよく歌いますか。

彼らがよいとすればよいのです。

全ての兵士が歌ってみてよいとすれば、そのとき承認しましょう」

その後、創作チームは主席の指示に従って新作の人民軍歌を広範に普及して意見をまとめ、さらに立派に完成した。

そうして1969年6月、『朝鮮人民軍歌』が誕生した。

アンコールを受けた合唱

1967年12月16日、金日成主席は最高人民会議第4期第１回会議で朝鮮民主主義人民共和国政府政綱『国家活動の全ての分野で自主、自立、自衛の革命精神を一層徹底的に具現しよう』を発表した。

政綱に接した創作家たちはそれを歌で形象化したい衝動に駆られた。

彼らは、主席が抗日革命闘争時期につくった不朽の名作『祖国光復会10大綱領歌』の模範に見習って党政策を解説した歌謡『10大政綱の歌』を創作した。

ある日、民族管弦楽と合唱『10大政綱の歌』を聴いた主席は、歌詞の数か所を修正した。

第2節の3番目のくだりの「革命の基地」を「社会主義基地」に直すなど、社会主義制度が勝利したわが国の現実を正確に反映するようにした。

主席によって完成された歌詞を受け取った創作家、芸能人たちは、歌の形象化に取り組んだ。

翌年5月、第2回全国チョンリマ作業班運動先駆者大会の参加者

は音楽・舞踊総合公演を観覧するようになった。

主席は大会の参加者とともに公演を見た。

順が回ってきて舞台には民族管弦楽と合唱『10大政綱の歌』が響き渡った。

わが党のチュチェ思想を一層輝かせて
自主性を強化するのが第一条
経済と国防力をしっかり固め
自主、自立、自衛の路線を貫徹しよう
……

歌が終わろうとしていたとき、主席は、すこぶる満足して言った。

「『10大政綱の歌』が立派です。

もう一度聴きましょう。……

歌いやすいので誰もが歌うことができ、また歌えば10大政綱をおのずと覚えるようになるでしょう。

このような歌は普及にも便利です」

合唱が終わって退場しようとしていた指揮者は、舞台の裏に上がってきた幹部から主席の言葉を伝え聞いて身なりを正し、再び舞台に立った。

下ろしていた幕が上がり、『10大政綱の歌』が再び響き渡った。

アンコールを受けた合唱が終わると、主席は真っ先に拍手を送った。

そして夕方に休憩室でも、10大政綱の内容をこのように短くして歌うとなんと素晴らしいことかと言った。

主席から高く評価された歌謡『10大政綱の歌』はその後、朝鮮民主主義人民共和国創建20周年慶祝音楽・舞踊叙事詩『栄えあるわが祖国』の終わりを飾る演目となった。

ところが公演を準備するとき、終曲が長ければ間延びがするとし、この歌を第5節まで歌うことにした。

1968年8月末、主席の臨席の下に音楽・舞踊叙事詩のリハーサルが行われた。

管弦楽の前奏についで力強く響いていた『10大政綱の歌』がいつの間にか第5節に至り、リフレインをもう一度繰り返しては終わった。

公演が終わると、主席は幹部と創作家たちにこの歌は10の条項を全部歌わなければならないと言った。

そうして芸能人たちは、歌を再び第10節まで練習することになった。

この9月のある日、平壌大劇場に出向いて第10節まで歌う合唱と舞踊『10大政綱の歌』を鑑賞した主席は、今回のものは大変素晴らしいと満足し、花かごを先立たせて舞台に上がって芸能人を祝い、彼らとともに記念写真を撮った。

幸福と忠誠の歌

不滅の頌歌

1972年は、金日成主席の生誕60周年に当たる意義深い年である。

新年を前にして一女性歌手は、金正日国防委員長から二つの課題を与えられた。

一つは主席に花かごを差し上げることであり、もう一つは新作の不滅の頌歌『金日成主席の万年長寿をいのります』をソロで歌うことであった。

1972年の元旦、主席が宴会場に姿を表した。

場内は嵐のような拍手でどよめいた。

全人民の祝福の心を込めて主席に花かごを差し上げた女性歌手は、丁重に新年の挨拶をした。

主席は彼女の手を取り、「ありがとう、ありがとう！　昨年、芸術総括を着実に行ったのだから、新年にも素晴らしい歌をより多く歌いなさい」と言った。

そして、彼女の手に祝杯を持たせた。

やがて、公演が始まった。

彼女の胸はどきどきと高鳴った。

歌は、金正日国防委員長が創作家たちに種子を与え、1年半以上も指導して名曲として完成させた不滅の頌歌であった。

いつしか彼女が出演する順番になった。

彼女は主席に丁重に挨拶をし、『金日成主席の万年長寿をいのります』を歌い始めた。

われらに　幸せあたえんと
すべてを捧げし　わが主席
慈父なる愛　そのふところに
きょうの幸せ　花さけり

歌手の目からは熱い涙がこぼれ落ちた。
宴会の参加者たちもみな感激にのどを詰まらせた。
いつしか歌は合唱と化した。

天地はてるも　かわるまじ
日輪つきるも　かわるまじ
あつきめぐみ　永久につたえ
もえる忠誠　捧げよう

ああ　偉大な主席をあおぎ
われら　万年長寿いのります

歌は終わったが、むせび泣きは止むことなく続いた。

主席はかすれた声で、泣くんじゃない、と何度も言った。

しかし、誰も泣きやまなかった。

全人民的な頌歌『金日成主席の万年長寿をいのります』は、この日から全世界に響き渡った。

格調高く詠んだ歌詞

アジア地域チュチェ思想研究所の書記長で、インドの著名な政治学博士であるコビンド・ナライン・スリバスタバが朝鮮を再び訪問したのは1983年6月のある日であった。

金日成主席は、重病を患ったコビンドが家族と一緒にゆったりとくつろげるようにするため、夫人や二人の息子も連れてくるようにした。

ある日、主席は彼らと昼食を共にした。

楽しく食事をしていたコビンドは、金日成主席閣下に会ったインドの人々はみな自主的な思想意識を持つようになると言った。

主席はそれにうなずき、次のように述べた。

「……人間は自主的な思想意識を持つことが重要です。……

われわれが抗日革命闘争をしていたとき、遊撃隊員が好んで歌った大衆向きの歌がありますが、その歌には、人間は最初から自由権を等しく持って生まれた、自由権がなければ生ける屍も同然だ、生命を捨てても自由は必ず守る、という内容があります」

主席は、抗日革命闘争の日々に歌ったその歌の歌詞をたどるかのようにちょっと考えてから歌詞の一節を詠んだ。

人は人として
自由権を等しく持って生まれしもの
自由権なければ生ける屍
生命捨てても自由は守る

コビンドは感慨深い顔で格調高く詠む主席を仰ぎながら、その歌詞の一句一句を反芻してみた。

抑圧に苦しむ血の絶叫であり、自由と独立を目指す聖戦でのどがかれるほど叫んだ血の絶叫であった。

コビンドは一節の歌詞を通じてチュチェ思想の偉大な真理の誕生について改めて知らされた思いであった。

主席は続けた。

「……人間がこの世に生まれて何の自由もなく、自主性と創造性もなしに他人に束縛されて生きるならば、人間としての地位を占めることができず、馬や牛のような動物になってしまいます」

「ごもっともです」

コビンドは大きな感動の中で主席の話を聞き、チュチェ思想の深奥な意味をより深く胸に刻んだ。

外国人の感嘆

1985年6月のある日の夕方、金日成主席は咸興大劇場で全国幼稚園児芸術祭典総合公演を観覧した。

公演の観覧には主席と会見するために訪朝した外国人も同席した。

合唱『花つぼみたちが挨拶をささげます』から始まった公演は、いつしか童話歌物語『ウサギの後悔』に移った。

舞台に可愛いウサギが現われた。

ヤクス谷に虫捕りに行くウサギが、食糧をどのくらい用意すればよいかと考えてみたが、よく分からないのでハリネズミやリス、カメにそれぞれ聞いてみる。

ところが、ハリネズミとリスの答えが違い、カメの言葉がまた違ったので、ウサギは判断に困る。

このとき、ヤギおじいさんがそれを聞き、4匹の動物を一列に並べて競走をさせる。

ウサギが一番先に目的地を回って来、しばらくしてリスが戻って来た。

その後にハリネズミが着き、カメは最後によたよた歩いてきた。

競走が終わると、ヤギおじいさんはウサギに「どうだ。駆ける速度が違うんじゃないか。食糧は自分の歩みに合わせて用意しなくちゃ」と諭した。

童話歌物語が終わると、主席は微笑みながら拍手を送った。

そんな主席を見て外国人は、素晴らしい作品です、これは金日成主席閣下の偉大なチュチェ思想を反映したものです、チュチェ思想は全ての問題を自分の実情に即して自分の頭で解決していくことを求めていますが、この作品はその立派な思想を芸術的にビビッドに描き出しました、と感嘆した。

舞台では子どもたちの明朗で面白い歌と踊りが次々と披露された。

子どもたちの公演に夢中になった外国人は、子どもたちがこのように素晴らしい公演を行うことができたのは金日成主席閣下の賢明な指導があり、優れた社会主義制度があるからだと賛辞を惜しまなかった。

主席は微笑み、彼の言葉に謝意を表した。

公演が終わると、主席は幹部たちに、今日立派な劇場で子どもたちの公演を見ると10年は若返ったようだ、私の年齢は今年73歳だが、63歳になった気分だ、と意味深く言った。

実に10年は若返ったように満面に笑みをたたえる主席を仰ぎ、外国人はしきりに感嘆した。

66年ぶりに再び歌った歌

1991年9月のある日、金日成主席は葡坪革命史跡地を訪れた。

17年ぶりにここを再び訪れた主席は、葡坪が革命伝統教育の

拠点として立派に整備されたことに満足した。

葡坪革命史跡塔へ足を運びながら主席は、葡坪の渡し場を通って平壌に向かい、2年が経った1925年2月3日に10代の年で鴨緑江を再び渡って八道溝に向かっていたときを振り返った。

主席は史跡塔の前で講師の解説を注意深く聞いた。

講師の解説は終わったが、深い思いにふけった主席はその場を離れようとしなかった。

やがて主席は、随員と史跡館の職員たちに、私が鴨緑江を渡りながら歌った『鴨緑江の歌』を皆さんも知っているなら一緒に歌ってみようと言った。

そして、忘れ得ぬあの日の歌を静かに歌い始めた。

1919年3月1日
この身　鴨緑江を渡りし日
年ごと　この日きたりても
誓い果たさずんば　われ帰らず

誰かがつくったという『鴨緑江の歌』、抗日の血戦万里の道を踏み分けて国の解放を成し遂げた主席が、66年ぶりにあの日の歌を感慨深く歌うのであった。

鴨緑江の流れよ　祖国の山河よ
故郷にまみえるは　いつの日
死しても忘れえぬ　誓いあり

祖国をこの手に　帰りなん

歌声は鴨緑江の流れに沿って秀麗な祖国の山々を越えて響いていった。

ついに探し出した歌

金日成主席は吉林毓文中学校で革命活動を行っていたとき、中国の愛国的な歌である『蘇武歌』を習い、抗日戦の日々にこの歌を好んで歌った。

『蘇武歌』は、中国人民の愛国主義的な思想・感情を反映した歌である。

この『蘇武歌』をもって中国人を感化し、彼らを反日闘争へ呼び起こした体験が非常に強烈だったので、主席は解放後、この歌の歌詞を入手しようといろいろと努力した。

そうして、80の高齢になって中国語の歌詞を手に入れた。

歌詞を見て深い感慨にふけっていた主席は、幹部たちが集まった席で『蘇武歌』を歌った。

主席は、回顧録『世紀とともに』で当時のことを感慨深く振り返った。

「そのとき、私はうれしさのあまり、80の高齢であることも忘れて『蘇武歌』を歌った」

一曲の歌に過ぎなかったが、そこに自身の青春時代、革命闘争

と切り離して考えることができない多くのいきさつが秘められていたため、主席は大きな喜びと感慨にひたって歌を歌ったのである。

その後も主席は、中国の革命闘士と共に苦難に満ちた共同闘争の道を切り開いた日々が恋しく思われるたびにオルガンでこの歌を弾いたりした。

偉人の一生と音楽

執　筆 ： 許順福、李順英
編　集 ： 安鉄鋼
翻　訳 ： 李鮮日
発行所 ： 朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
発行日 ： 2026年3月

ㄱ-250880365253

E-mail: flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp

不朽の名作

思郷歌

1.　古里をたつ朝　わが母は
門に出て涙ぐみ　「さあ お行き」
その言葉　ああ　耳をうつ

2.　わが家のほど近く　小川あり
弟としぶきあげ　たわむれた
その姿　ああ　浮かびくる

3.　大同江うるわし　万景台
なつかしや山や川　解放の
晴れの日に　ああ　帰らん

ISBN 978-9946-0-2723-4